
背中の妹

HS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背中の妹

【Nコード】

N7987F

【作者名】

HS

【あらすじ】

気づけば、いつもぼくの背中には妹がいた。ちょっとシニールで切ないお話です。

ブローグ

ぼくらは、生まれたときからひとつだったんだ。
これからもずっと……そうなのかな……。

「ちょっと、君達！」

ひさしぶりによく晴れた日曜日、
ぼくらは、気持ちよく風を受けて走っていた……。
また自転車の二人乗りということで、呼び止められてしまった。

ぼくは、定期のようにいつもの証明書と中学の学生証を警察のお
じさんに見せる。
すると、おじさんは不思議な顔をしながら、ぼくらの足のほうを見
て……

何事もなかったように、「気をつけるんだよ」と言って
無理な笑顔をしながら、手を振ってくれる。

……まあ、いつものことだ。

そう……ぼくらは、生まれたときからひとつだった。
なぜだか知らないけど、ぼくの背中……

正確には、背骨の付け根あたりから、ぼくたちは枝分かれしている。

つまり、上半身が2つあるってこと。

だから、妹はいつも、どんなときでも、ぼくの背中において、今日と一緒に自転車に乗っている。

まあ、足のほうは、いつもぼくの担当だから、妹は歩くって感覚を知らないんだと思う。

「また、呼び止められちゃったね、お兄ちゃん。」

妹は、ちよつと不満そうに言うけれど、

ぼくは、まんざらでもない気持ちもする。

妹がそう言うてくれると、心強いというか、なにか安心した。

「コンビニ、寄つてごうよ!」

梅雨が明けたと思ったら、今日はいきなり暑い……。

「おし、了解!」

「あたしは、ソフトクリームでお願いします!」

一応、胃袋は別々だから、妹も腹は減る。

まあ、あたりまえか……。

最近、ダイエットだの何だのって言ってるわりには、なんか、ぼくの肩甲骨あたりにときどき柔らかい感触が……
てなことは、鼻血が出ても言えないことで……。

コンビニに着くと、ぼくは自転車のかごに折りたたんだものを取り出す。

さすがに、自転車から降りると、けつこう一目で分かっちゃうので、妹をリュックにカモフラージュしてしまうのも、いつものこと。

「登山ですか？」とかよく言われるけどね。

そうそう、鼻血が出ても言えない件で、
じゃあ、妹は、結婚できるのかって、まだ早いけど、ときどき心配
してしまう。

妹に生殖器はないっていうことは、実は本人も分かってることなん
だけど……。

……妹は、恋愛とかしたいか思ってるんだろうか。

>つづく<

プロローグ（後書き）

これは、結合双生児の兄妹を軸として展開するお話です。
異性の結合双生児というのは、あくまでフィクションですが、
この兄妹を暖かく見守っていただけるとありがたいです。
完結できるよう頑張りたいです。（作者）

エピソード1

「お兄ちゃん、好き嫌いはダメだよ!」

そう言って、妹は、箸でピーマンをつまむと
ぼくの口に的確に押し当てる。

二人羽織りなんて、アホにしか見えない的確さで……。

「あのさー、たぶんピーマンエネルギーは、
おまえの方からまわってくるんじゃないね……」

「なにカツコ悪いこと言ってるの？」

将来、恥ずかしいことになるのは、お兄ちゃんだからね!」

妹のくせに、母親のような口ぶりだ。

とは言っても、ぼくは、母親というものを知らない……。

妹も知らないはずなのに、なんでこうもしっかりしているものか。

母は、ぼくらを産んだときに、亡くなった。

ぼくらの誕生日は、母の命日でもある。

父親も当然いるんだけど、今はお金を送ってくれるだけの存在だ。

だから、ぼくと妹は、今、二人でアパート暮らしをしている。

「もう、お湯たまったかな」

「あっ! やべ……溢れてるかも……」

追い炊きができない風呂なので、風呂も1回で済むのは
まあ……経済的かもしれない。

「お兄ちゃん……」

脱衣所で、後ろから妹がつぶやく。

ぼくは、なんのことだろうと、後ろを振り向く。

「見たら、ぶつって言いたかったんだけどな……」（怒）

そのあと後悔することになったのは、言うまでもない……。

風呂でぼくの背中をゴシゴシするのは、いつも妹の役目。

いつも妹の運転手になっているお礼ということになっている。
でも、今日はいつもより、少し痛い気がする。

お湯につかる。

「……まだ、怒ってんのかよ」

「ちょっと、ごめん」

「あ、あのさ……」

妹は、少しすまなそうに言う。

「べ……別に、見なければ、寄りかかるぐらいはいいよ。」

「はい？」

「ほら、お兄ちゃんも、柔らかいのか……嫌いじゃないんですよ」

「……！？」

「おっ、お前はソファーか！！（笑）」

と突っ込むのに、けっこう間が空いてしまった。

内心、妹はぼくのソファーになるために

生まれてきたと思うと、
どうしようもなく悲しくなった。

<つづく>

エピソード2

「お兄ちゃん、電気消すよ！」

「よろしく！」

そういえば、

電気を消すのは、いつも妹のような気がする。

一応言っとくけど、ぼくらは、仰向けに寝ることはできない。
バランスも悪いし、第一、妹を下敷きにするようになってしまう。

横向きが、うつ伏せで寝るのが、ぼくらの当たり前。

ぼくとしては、ほぼ妹の抱き枕状態で、

睡眠不足になったことは数え切れない……。

でも、最近は、妹も気を配ってくれているみたい。

「あのさ……」

なんでさっき、あーゆーこと言うわけ？」

“ソファア”の件で、ぼくはちよつと怒っていた。

「別になんでもないって……」

お兄ちゃんが喜んでくれたらと思っただけ……」

「よ……喜ぶわけねーだろ！ バカっ」

ぼくの肩をつかむ妹の指が少し震えていた。

「だって・・・お兄ちゃん、あたしのせいで幸せになれない気がするから……。」

……妹は本気で泣いている。

「あたしなんか、くつついてなければ、お兄ちゃんもっと自由なんだって……ずっと思ってた。」

ちよつ、それ、中学生の言うセリフかい！？ とは、とても突っ込めない。

ぼくをいつも奴隷のように扱き使う、元気な妹は、たぶん、ぼく以上にいろいろ気を使っていたのかもしれないと今になって気がついた。

「あーあ……
なに言ってたんだか！」

ぼくは、背中で妹を押しつぶして、仰向けになった。

「ちよーと、苦しい……よ。お兄ちゃん……！」

ぼくだって、妹を疎ましく思ったことだってないわけじゃない。でも、もし逆の立場だったらと思うと、ただかわいそうに思えただけだ。

「どうだ！ まいったか！
これで満足かい？（笑）」

こつやって茶化すことぐらいしか、今のぼくにはできないんだ……。

と思っていたら、

妹の振り上げた拳が、勢いよくぼくの急所に当たり……

「……………っ！……！！」

ちよっ、それは反則じゃあ……

<つづく>

エピソード3

「起きろー！！」

耳にタコができそうな、黄色い声が
ぼくの耳元で響く。

「……………」

……………また、朝が来た。

きのうは、激痛でしばし眠れなかった気がするんだけど……………。

そんなこともお構いなしに、とにかく妹は、朝が強い。

寝てる間に、ぼくの生気が妹に吸い取られてるんじゃないかと本気で思っくらい。

まあ、妹のおかげで学校に遅刻とかはないわけで、
助かってはいるわけだけど……………。

肩をつかまれて、揺らされる程度で起きたら運がいいけど、
仕舞いには、脇をこちょがしてくるのでとても困る。

ぼくが起き上がらないと、妹も身支度できないわけで、
妹も、まあ、とっても必死なわけ。

「ちよつと！ はやく、洗面所！！……………もあー、間に合わないじゃない！！！」

「ちよっ！ その前にトイレトイレっ……！」

「はあ？！ そのくらい我慢しなさいよ！」

……妹は、トイレというものに対する理解がまるでなくて困るっ。
毎日、2人分の排泄物を出す身にもなってみろ！！と叫びたいところだが……

食事の前にそれは絶対的にタブーだ。

「いつてきまーす！」

妹は、母の写真に向かって、前髪を整えつつ、いつも声をかける。
ぼくは……妹が言ってくれるので、いつもだまってる。

きのうは、あんなに晴れてたのに、

今日の空は、曇り空。

雨もポツポツ降っている。

「ええっと……かさかさ！」

二人乗りで相合傘とかって、どんだけだよ（笑！

とかって友達に言われたりすることもあるけれど、

傘は妹が持ってきてくれるわけで、まあ普通に便利だから、仕方がない。

そう……ぼくらは、それでも中学に通って……

自転車をこいでるうちに、雲の隙間から光が差しきて、
雨に濡れたアスファルトをキラキラ照らした。

<つづく>

エピソード4

学校に着く頃には、雨はすっかりあがり
自転車置き場の周りの木々は
水滴を纏って煌いていた。

「おっはよー、香奈ちゃん！」
同じクラスの女子が妹に声をかける。

「ゆっちー、おっはよー！」
……妹のネーミングセンスは、イマイチ分らない。

「おっす！ 建治！ きょーも香奈ちゃんカワイイっすー！」
「はあゝ?!」

一応、建治つてのが、ぼくの名前で、
声をかけてきた、この見た目はごっついのに、口はやたら軽そうな
人物は
浩二っていう名前。

ぼくはいつも、
ぼくと妹の名前が貼られた、ちよつと不自然な下駄箱に
靴を出し入れる。

ぼくの靴は“ぼくらの靴”なんだって、いつもながら思う瞬間。

キンコンカン

「やんべっ！ 遅刻すつぞ！」
浩二が叫んだ……。

……ついに、午後が来てしまった。

「おにーちゃん、おつそいよー！」
水しぶきの音と女子の黄色い声が辺りに響く。

今日は午後から、体育で水泳の授業。
本来、水泳は女子だけで、男子は陸上といった感じなんだけど。
まあ、妹は一応女子だし、
もしものときには、水泳ができたほうがいいと先生に勧められた。

とはいっても、泳ぐのはいつもぼくの方で、
妹とはいえば、お気楽にイルカにでも乗ってんじゃないかという態度。

浩二のやつは、なんて羨ましいんだー！！ とか言っけれど
ぼくは、ほんと堪ったもんじゃない。

しかも、妹は、身体的にスクール水着とかは着れないみたいで、
だからって、
なぜだか、ビキニ……。

あつ……ありえん……。
ぼくのほうが恥ずかしい気がする。

そっいえば、体育の時間はいろいろと人気者（？）になる。

逆立ちとかが良い例で、慣れたら4つの腕で4足歩行すらできてしまうことが発覚。

ありえねーっ（笑涙！！）

とかみんなから注目されたこともあった。

そうやって、支え合って、ぼくらはこれからも生きていけると思っていた。

<つづく>

エピソード5

放課後の教室。

今日は日直で、少し残って日誌を書いている。

とか言いつつ、クラスの人が書いた日誌に、つい読み入ってしまった。

みんないろんなことを考えてるんだなと思う。

……妹は、どんなこと書いてるんだろうか。

そう思った瞬間、

妹の短めの髪が、ぼくの耳と頬をかすめて、

妹は、ぼくの右の肩に首を乗せてきた。

妹は……気持ちよさそうに、寝ている。

こんなこともいつものことで……

窓から見える空は、まだ明るくて

テニスボールの打たれたり跳ねたりする乾いた音とか
応援の爽やかそうな声とかが聴こえてくる。

廊下の奥からは、吹奏楽のボーという低めの音。

廊下を走る運動靴の足音が周期的に響く。

すると、運動靴の擦れる音と同時に

「建治！」

右後ろから浩二の声が……

ぼくは振り返ろうと思ったけど、

妹の顔が視界を塞ぐ。

「あつ、わりー…… お邪魔でしたか、そうですかつ」

浩二は、小さい声だったけど、激しく動揺している模様。

妹は、高い声で唸ると、

寝返りをうつ如く、首をぼくの左肩に乗せ変えた。

その時見えた、浩二の顔がなにかすごくて……

「なっ?! 違うんだって、寝てるんだってっ」

ぼくもなぜだか、動揺。

こんな状況でも起きない妹はすごい……。

浩二はしばらく立ち尽くしてから、

ヨタヨタ歩いて、ぼくの右隣のイスに座った。

「おまえって、やつぱ羨ましいやつだな」

浩二があやしい笑顔でささやく。

「まあ、かわいいとは、思うけどさ……」

妹が起きてたら、絶対言わないようなことを言ってしまった。

浩二は、ふーんという顔をしてから少し黙って、

それから、妹の方をチラ見して……

「実はさ……オレ、おまえに言つときたいことがあったさ」

「なんだよ。改まって……」

「しーっ！ 香奈ちゃんが起きちゃうじゃんか」

「なっ、なにを今さら……」

「これは、男と男の約束だからな」

「おっ、おっ……」

「実はさ……、オレ、香奈ちゃんのこと……好き、みたいなんだわ」
浩二は全開に顔を赤らめながら、はにかんだ。

<つづく>

エピソード 6

「・・・・・・・・・・。」

いきなりのもので、それがどーいう意味なのか、理解するまでただ黙るしかなかった。

いや、ほんととは、どんなに考えても答えなんてわからないのだけど。

当の本人は、ぼくの肩で寝ているわけで……

そうこうしているうちに、

「じゃ、よろしく！ オレ、練習もどるわ！」

浩二は、スッキリしたような朗らかな顔をして、スタスタ走っていった。しまった。

スッキリしないのは、ぼくの方で。

“よろしく” って…… ぼくにどうしろと……？

とりあえず、日誌を急いで書き終えてから、妹を起こした。

「ううよく寝た！」

自転車に乗っているぼくの後ろで、妹が伸びをした。

ぼくは、夕陽に輪郭が光る雲をぼかんと見ながら、さっきのことを繰り返し思い出していた。

人通りのない、まっすぐな道が続く。

と、いきなり視界が塞がれた。

キキー!!!

ぼくは、ブレーキを握ってなんとか無事に自転車を止めた。

もちろん妹のしわざ。

「なっ、何すんだよ!!!」

「なんか、お兄ちゃん、さつきから元気ないみたいだから」

なっ、何がしたいんだこいつはー!!!

妹の行動は意味不明だが、見透かされているようで、それ以上怒る気にはなれない。

「お、おまえもさ、そういう危ないことするなよな。

一応、女の子なんだからさ……。」

「どうせ、いちおうですよ。」

さつきは……かわいいたか言ってたくせに!!!」

妹はいかにも可愛気なさそうに口を大きく横に開く。

「はっ?! んなこと……」

ぼくは、“さつき”という状況を思い当てると、呆然となった。

ぼくが、浩二にさつき不意に言ったこと……。

「……おっ、おまえ、起きてたのか!!!」

もう聞くまでもないんだけど。

妹は、ふふぐんと得意げな表情をして、

「せっかく、男友達水入らずな感じに気を使ってあげたのになあ」

妹はあの時、ぼくの背中ではどんな気持ちでいたんだろうか……。

少しの沈黙の後、妹が口を開いた。

「人に好かれることは、しあわせなことだし、あたし、うれしいんだよ。」

「……………」

「でもね。あたし、お兄ちゃんと一緒にじゃなきゃ、生きていくことさえできなくて……………」

だから……………ごめんね。」

まるで、浩二に言うかのような……………。

「まあ、いいんじゃない？ オレ、浩二のこと、嫌いじゃないけどさ。」

「

「お、お兄ちゃんって、そういう趣味だったの〜!？」

なっ、なんでそうなる……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7987f/>

背中の妹

2010年10月8日13時07分発行